

とは考えないですよ。

僕としてはまず、道元さんが亡くなってからその遺志・心を誰かが継承する、というところを描きたかったんです。そうすると逆に始めは、ご自身が如浄禅師から法を受け継いだ、やはり中国から始めなければならぬ。終わりと始めを決まることで、あとはこの間をどう埋めていくか。

◎では、その「継承」について伺います。映画の中で継承されるのは…

高橋 (きつぱりと) 寂円さん。

◎監督の中では継承の象徴は寂円禅師なんですね。懐奘禅師は如何ですか？永平寺の二世は懐奘禅師ですが。

高橋 懐奘さんも継承者の一人には違いないが、僕には少し学者っぽく映ったんですね。寂円さんには、達磨大師に通じるものを感じました。学問的・観念的に教えを求めようとするのではなく、ただひたすらに坐り続ける実践者として寂円さんを描きたかったんです。

◎この映画に限らず、監督にとって主人公に成り得るのはどんな人物ですか？

高橋 やっぱり刺激的なアクションをしてくれる人物ですよ。実際の動きであつたり心の動きであつたりね。そういう意味では、道元禅師は極めて刺激的なアクションがある人物ですよ。あれだけ浮いた噂がないのは、逆に刺激的だったんですよ、僕にとつては

(笑)。自分たちにはできないことを成したというだけで刺激的ですよ。

わかりやすいドラマ性っていうのは、周りの人間がやればいい。それに對して道元禅師がどう対処するのか、というところで十分ドラマとして成立すると思います。

◎その意味では、おりんと執権・北条時頼は、元来道元禅師の周辺に足りない「色」と「権力」の象徴だと思います。この二つがあると一気にドラマチックになりますね。

高橋 おりんに関しては、公家出身の道元さんに対して最下層の出生という対比もありますね。過去を背負った人間も変わることができるとを伝えたかった。おりんも道元さんの継承者の一人です。

時頼と道元さんに、原作にはない激しいやり取りをさせることで、権力相手でも一切動じない、道元さんの姿がきちつと見えてくると思えました。

逆におりんには、時に泣いたり気色ばんだり、極めて人間臭く接しています。そこはやっぱり権力者とは異なり、毅然よりも優しさを含めた人間らしさがあつていいだろう、と思えました。

坐禅が自利だけでは意味がない

◎「この世こそ浄土でなければいけない」というメッセージが冒頭で語られますが、これは監督の思いとしてあるのですか？



高橋 ものすごくありますね。死んでからよりも、この世がある種の悦びの世界でないといけない。そうでないと宗教の役割は果たせないと思っています。

◎曹洞宗へは「坐っているだけで人が救えるのか」という疑問や、現世で「救わない」典型のように見る向きもありますが、観ていて痛快だったのは、映画の中で道元禅師はドンドン「救って」いますよね、目に見える形で。

高橋 私は「坐禅は他人を救わない」というイメージは違うと思っています。だから「坐禅をして奥に引き籠る」のではなく、もつと大衆との触れ合いを見せたかったんです。私なりの解釈ですが、坐禅っていうのは、自分を無心にするので、やつと他人を救える優

しさ、他を思う心を養うために坐るんだらうなっと思っんです。自分だけ悟ったってしょうがないだろう、って思っているから。

◎ちなみに坐禅のご経験は？

高橋 ありますよ。曹洞宗のお寺でも経験していますし、実は今でも坐禅や瞑想に近い精神修養を25年くらい続けています。だからあの世界観は非常に分かります。曹洞宗の坐禅は初めから「只管打坐」って一番難しいことを言うじゃないですか(笑)。坐っていると、自分の中の妄想やダメさ加減がすごく良く分かります。だから「あつ、これを滅しよう」と気付けることつてあるのではないでしようか。

映画ゆえの演出

◎曹洞宗侶に鑑賞後の感想は聞かれましたか？

高橋 何人が伺いました。中には「坐禅中にこんなこと(法界定印ではなく、内在する仏性を包むような印相)はない」と仰る方もいましたが、それは分かってますよ、こつちも(笑)。あれは坐禅しながらも何ものかに手を差し伸べる、というイメージの演出で、監督として卑怯なのは、あれを子どもにさせたこと(笑)。

それから、道元さんが悟りを開くシーン。自分の中では「蓮台」っていうくらいなので、泥の中から上がつていて、どこか高い所に行けるだろうって、勝手に勝手に恥ずかしいイメージ